

アツキが事故に遭った瞬間を見ていたのはナツキとリュウ・イーだった。

改修を控えたフォート内の一面に面した通路には搬出した備品が雑多に積み上げられ、更に工事に使う資材が置かれて通行スペースを圧迫している。

フォートの性質上外部の業者を大勢立ち入らせるわけにもいかず工事は遅れていた。走り回るせいで何度もそこで転びかけているナツキは通るたびに文句を言い、ノーラは舌打ちをし、リュウ・イーは僅かに眉をしかめていた。

顔色一つ変えずにその通路を使っていたアツキは、しかしナツキの言葉に気をとられて資材に隠れた扉から人が出てくるのに気づかなかつた。また、出てきた作業員の視界は抱えた荷物で塞がれていた。

アツキが作業員にぶつかり抱えていた荷物が落ちる。その直撃を避けようと二人は身を逸らしたが、運悪く避けた先には積み上げられた資材の山があった。

「アツキ？」

リュウ・イーが振り返る。二人の上には資材が崩れ落ちていた。

「きやああああ！ アツキ大丈夫？」

ナツキが悲鳴をあげて駆け寄るのを腕で制してリュウ・イーが資材の下から二人を引きずりだす。

「アツキ！ アツキ！ ねえってばあ」

「触るな。頭を打っているかもしれない。」

たいした怪我をせずに済んだらしい作業員はリュウ・イーとナツキの間に横たわるアツキを見て蒼白な顔になっていた。リュウ・イーはまずアツキの呼吸を確かめ、脈を確かめた。

「アツキ、聞こえるか？ 聞こえていたら何か声を出すか、手を動かしてみる」

呼び掛けたがアツキは動かなかった。

「意識が無いようだ。気絶しているだけなら良いが：

…ナツキ、医療班を呼ぶんだ」

呼吸が苦しくないよう襟元を緩めてやる。

アツキの側で今にも泣きだしそうだった少女が慌てて携帯端末を取り出したその時、アツキが僅かにみじろいで目を開けた。リュウ・イーに支えられながら上半身を起こしてぼんやりと辺りを見回す。

「アツキ大丈夫？ 痛くない？」

「頭を打ってはいないか？ 頭痛や耳鳴りは？」

アツキは寝呆けたようなぼんやり顔で二人を見て、